

第三章 事業評価

第1節 事例報告

1. 当事者につながった事例
2. 多機関が会議を経て連携した事例
3. 世帯分離した事例
4. 親亡き後一人取り残された事例
5. 一歩を踏み出した事例

第2節 「リンク」連携機関および利用者の声

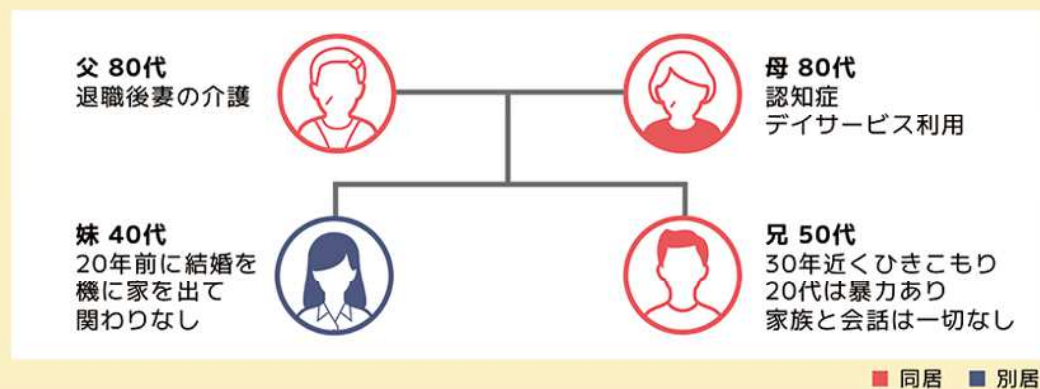
1. 連携関係機関からの意見
2. 利用者の声

※事例は個人情報保護の観点から複数の事例を加工しています。

第1節 事例報告

1. 当事者につながった事例

実家を離れ関わりをもたなかった妹が、母の認知症を機にケアマネとつながり、将来の不安からひきこもりの兄について「リンク」への相談が開始。相談が進む中で、兄本人から相談へとつながった。



支援状況

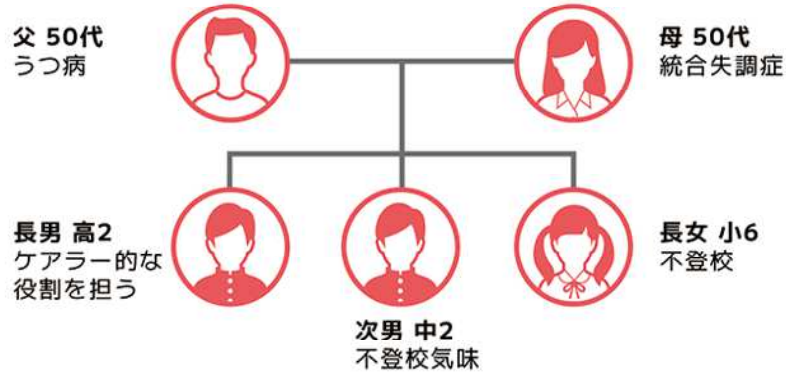
関係機関	ケアマネ、あんすこ、医療機関、デイサービス、地域社協事務所、地域家族会、ファイナンシャルプランナー、保健福祉課、課税課
支援までの経過	兄は仕事が長続きせず、職を転々とする。仕事のことで両親と言い争い、暴力をふるったあと部屋にひきこもるようになった。昔の暴力の記憶から、両親、妹ともに兄には関わらないように30年間生活をしてきたが、両親の高齢化により介護事業者の関わりが始まった。
支援開始後の展開	「リンク」で半年ほど父と妹と面談を重ねる。昔の兄妹の関係性が悪くなかったことから、まずは妹から兄に「介護のことで相談をしたい」という旨のメモをメールアドレスを書き添えて渡したところ兄からメールがきた。 30年の苦悩を綴ったもので、高齢化した両親、年齢を重ねた自分に対してどうして良いかわからなかったとの記載があった。 兄妹がやりとりをしばらくしてから、妹が兄を「リンク」につなぎ、兄と「リンク」がメールのやりとり開始し、その後来所に至った。兄はゆっくりと外出に慣れることから始め、母親の介護状況や父親の健康状態を「リンク」が介護関係者と共有しながら、家族の状況変化に対応している。兄の非課税手続きを手伝い、介護費用も抑えられた。今後の介護費用の不安や父の孤立化を解消するため父を地域につなぎ、近所に相談できる人を増やしていく。

コメント

ひきこもり問題は家族全体が孤立をした状態が何十年も続くと、家族も本人も疲弊をし、諦めの気持ちにもなっていく。家族全員の気持ちを大事にしながら、歳月の経過で起こる絡み合った課題の全容把握をしながら進めていく必要がある。

2. 多機関が会議を経て連携した事例

父が仕事に行かずひきこもり状態となっていると近くに住む叔母が「リンク」に父を連れて来所。子どもたちは食事もままならない状況であることが判明。



■ 同居

支援状況

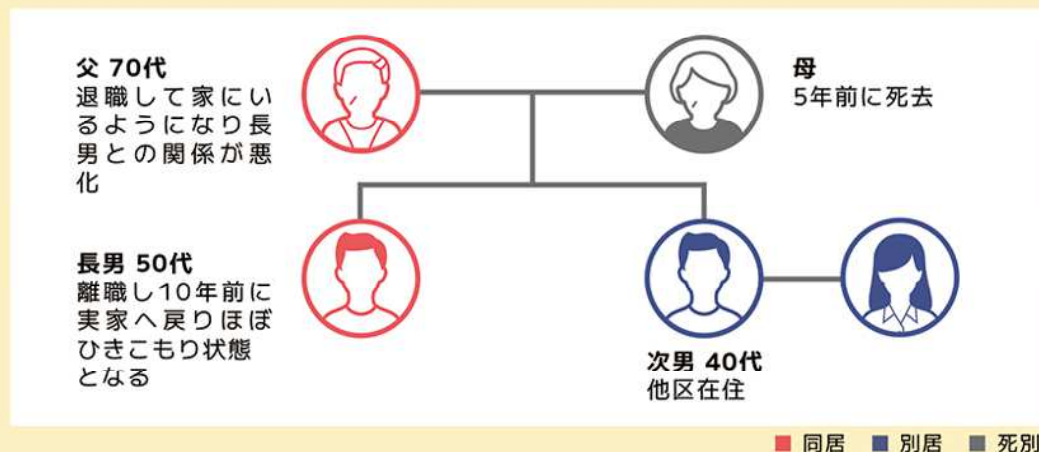
関係機関	健康づくり課、生活支援課、子ども家庭支援センター、児童相談所、小中学校、高校、地域社協事務所、民生委員、子ども食堂、医療機関、不動産会社
支援までの経過	母が体調不良であるため、父は家事や子どもの世話などを全て行う中、仕事もうまくいかずうつ病を発症しひきこもり状態になった。父に代わり長男が家のことや弟妹の面倒をみているが、金銭的に厳しい状況が続き、食事も十分ではなかった。
支援開始後の展開	「リンク」が父と連絡を取り合い、来所した時に家計状況を確認。仕事には行ったり行かなかったりの状態。児童相談所も関わっていることが判明し、個別ケース検討会議を開催。 今後の生活保護受給も視野に入れ生活支援課や、地域資源の利用を考え社協地区担当にも出席依頼。現在関わる機関とあわせて8機関で会議を行い、今後の支援の検討を行った。その結果、家計状況と生活保護の要件を見ながら生活支援課へ案内することや、学校関係者と自宅訪問時の子の様子を共有すること、地域の子ども食堂や学習支援につなぎ、子どもたちの様子を確認することなどが決められ実行することになった。 会議後の働きかけで、子どもたちが地域の子ども食堂に食料を取りに行ったり地域の人と話をしたりして家庭内の状況を把握できるようになった。その後、生活保護につながり転宅支援も受けている。また、両親の体調を見ながら次男長女の進級を見守り、長男の希望する進路によっては生活福祉資金の教育資金の貸付、受験生チャレンジ貸付も視野に入るため、引き続き学校等と連携をとっている。

コメント

家族全員に支援が必要な状況。個別ケース検討会議が有効に働いた事例である。それぞれの機関が対象となる家族にアプローチをし、地域の協力を得ながら対応する流れへとつながった。

3. 世帯分離した事例

母が健在だった時には落ち着いた生活ができていたが、母の死後はひきこもり状態の長男と父の関係が悪化。心配した次男が相談に来所した。



支援状況

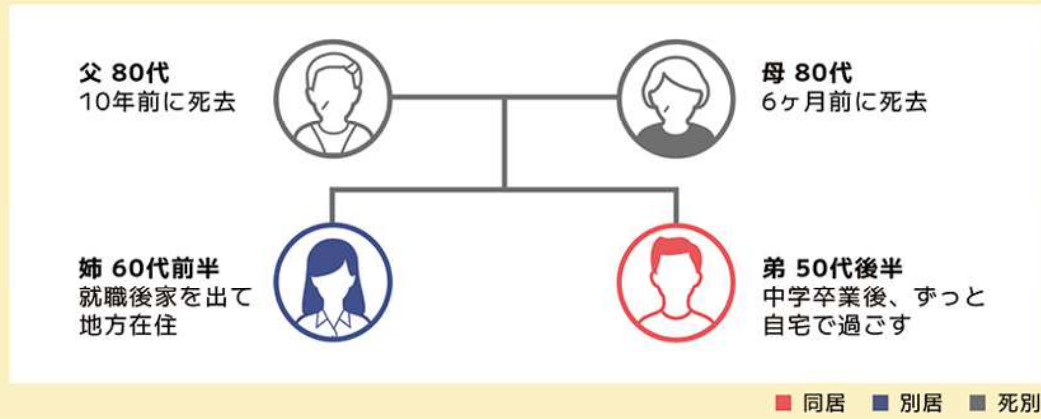
関係機関	健康づくり課、医療機関、生活支援課、社会保険労務士、不動産会社
支援までの経過	長男は10年前の離職時から体調不良で再就職ができない状況が続いていたが通院歴はなし。母が存命中は父との関わりは薄かったが、母が死去し父の退職で在宅時間が長くなり接点が増えたことから長男と父の関係が悪化。口論しては警察を呼ぶ事態が続いていた。
支援開始後の展開	次男来所の聞き取りで、警察関与後、健康づくり課保健師が訪問を行なっていることが判明。また、父も年金生活で息子を養うことが難しい状況で、父一人ならなんとか生活ができる経済状況であることがわかった。健康づくり課保健師と連絡を取り合い、数ヶ月かけて保健師同行で長男に「リンク」へ来所してもらうことができた。面談で長男の思いを聞いたところ、家で窮屈な生活をしていること、父の経済状態はわかっており一人暮らししたいが、自身も貯金がなく、通院費の工面ができず、体調も戻らないことなどがわかった。次男の金銭的な協力（通院費と転宅費用）によりまずは「リンク」同行で通院を開始し、一人暮らしのために転居先を探した。その後体調を整えながら一人暮らしを開始。生活費が不足する状況になったため生活保護を申請。現在は通院継続しながら障害年金の申請を進め、少しずつ働くことも視野に入れ始めている。物理的な距離ができたことで父との関係も改善しつつある。

コメント

家族が適度な距離感をもつことで関係性が安定することもある。また適切な支援が入ることで本人の自立が進むケースもある。家族間での膠着した状態にどうアプローチしていくのかケースバイケースの対応が必要。

4. 親亡き後一人取り残された事例

両親存命中は自宅で問題なく過ごしていたが、両親の死後一人残された状態を心配したあんすこの職員から「リンク」につながった。



支援状況

関係機関	あんすこ、母の成年後見人、成年後見センター、日常生活支援アドバイザー（ぷらっとホームのサービス）、健康づくり課、保健福祉課、医療機関
支援までの経過	父母への介護サービスが入っている中で、息子の存在を支援者側も把握していたがほぼ関わりはなかった。介護については姉を中心に相談が進んでいた。母死去後、心配したあんすこ職員が訪問したところ、生活がままならない状態であったことが判明。「リンク」につながる。
支援開始後の展開	まずは日常生活を整えるため、ぷらっとホームの日常生活支援アドバイザーが訪問し、食事の準備や掃除洗濯など最低限の生活についてアドバイスと見守りを行った。その過程で本人に障害の可能性も考えられたため、通院につなげ、医師の判断で障害手帳取得に向けて動き始めた。 また日常の金銭管理にも不安があったため、姉の申し立てで後見制度の利用を検討し、後見センターとのやりとりを開始。後見人がつくまでの間、父母の後見人が見守りを行ってくれることとなった。 他者との関わりは拒否的ではなかったため、「リンク」が様々な手続きの支援や通院に同行することで信頼関係も構築でき、今後の生活についても徐々に自身の希望を話すようになってきた。

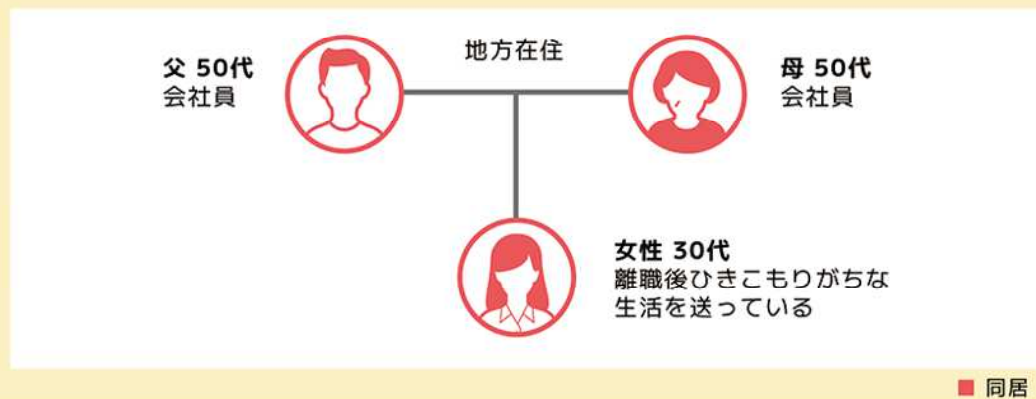
コメント

家族関係が良いほど、どこの相談窓口にもつながっていないというケースがある。兄弟姉妹が心配をしても両親が健在のうちには親が拒否する場合もあり、スムーズに支援につながりにくい現状がある。

この事例のように、ひきこもりの一因に障害がある場合、母の死去後の対応としてまずはひきこもり当事者の生命の安全を第一に考えることが大切である。

5. 一歩を踏み出した事例

大学入学で地方から上京し、区内で一人暮らし。その後就職したがパワハラで体調を崩し退社。現在は両親からの仕送りで生活をしている。



支援状況

関係機関	就労準備支援事業担当者・就労支援担当者（ぷらっとホーム）
支援までの経過	自ら来所し、今後どうしたら良いか不安で相談をしたいと希望。通院はしており、現在は精神的には安定傾向にある。医師からも就職活動をして良いと言われているが、ブランクがあるため自信がなく、一人になると不安な気持ちになって動けなくなる。 両親はまだ働いており、しばらくは仕送りができるので現在の状況も肯定的に受け止めてくれているが、両親への申し訳なさも感じている。
支援開始後の展開	まずは面談をしながら不安な気持ちを和らげつつ、今後始められそうなことや出来そうなことを考えていった。その中で、就労準備支援事業の神社の清掃ボランティアを希望されて開始。朝早いボランティアだが熱心に通い、少しずつ他の人との会話もできるようになっていった。少し自信が付き始めたことから、ステップアップをし3ヶ月の介護施設での体験就労を行い終了した。 今後は就労支援員と面談をし、就労や資格取得などどのような道を進むのか、キャリアカウンセリングを受けていく。また並行してリンクの面談も継続し、就職活動での不安定になりがちな気持ちを支えていく。

コメント

大学入学や卒業で上京してきた後にひきこもってしまう、地方の両親が仕送りを続けるケースは多い。両親が高齢であれば両親の生活を守るためにも地方の支援員との連携が必要になる一方、両親が現役であれば、仕送りが続いている間に早急にひきこもり当事者への有効な支援について一緒に考えていく必要がある。本人の不安な気持ちを受け止めつつ、プログラムも自身で選択できることが重要である。

第2節 「リンク」連携機関および利用者の声

1. 連携関係機関からの意見

「リンク」と協働してみても

- ぶらっともメルクもどちらのスタッフも知っていたので関わりやすかった。今後、8050や7040の事例は増えていくので連携は必須と思っています。(あんすこ)
- 支援者同士が顔の見える関係であることで、安心感が持て、チームとして動くことができる。(ぼーと)
- 情報共有ができ、いろいろな視点で考えられた。(児童相談所)
- 世帯全体を様々な角度から見て、タイミングやきっかけを探し(支援機関が)動きだすことができる。(生活支援課)
- 関係機関と情報共有することで当事者の方の今後の見通しが見えたと思います。(生活支援課)
- 「リンク」だけではなく関わりのある機関と相談できることは保健福祉課としてはメリットだと思う。(保健福祉課)
- 今まで関わりがなかったひきこもりのケースで、健康づくり課が関わる必要のあるケースの把握ができるようになった。(健康づくり課)
- 「リンク」とメルクマールの役割や立ち位置の違いがわかりにくい場合がある。(健康づくり課)

個別ケース検討会議に参加してみても

- 会議に出席することで、支援の最初の部分から関わり、関係者と共通認識をもてるところが良いと思った。(ぼーと)
- 自分の分野での主催の会議が多かったので、今まで関わっていない機関とも連携出来た。(児童相談所)
- 様々な関係機関がそれぞれの立場で具体的な支援の方向性を伝えられ、また、支援者が同じ方向で支援することを確認できる貴重な場であると思いました。(生活支援課)
- 多岐にわたる関係者が一堂に会し、必要な情報を一度に確認できたのは大きな収穫だった。ただし会議後に「リンク」が収集した情報が逐次提供されなかったことは残念であり、積極的に情報交換を行う必要があると感じた。(生活支援課)
- 舵とりが誰なのかがはっきりとしていない感じを受けた。アプローチを誰がどうしていくのか決められたことは前進していると思う。(保健福祉課)
- 多くの参加機関が参加することで、重層的にケースを把握・検討することができた。具体的なケース検討をする会議としては、参加人数が多すぎると感じることもある。(健康づくり課)

「リンク」開設前後での支援の変化

- ひきこもりは「リンク」につながれば良いと明確になった。迷いなくひきこもりは「リンク」につながれるようになった。(ぼーと)
- 今までの関連機関では対応しきれないケースがあったので、「リンク」が開設されたことによって、相談窓口が広がった。(児童相談所)
- 個別ケース検討会議をとおし、世帯の課題がいったん整理され、必要な取組みが見える状態で生保につなげていただくので、とてもやりやすい。(生活支援課)
- 劇的な変化は見られないものの、支援の選択肢が増えたことはCWにも浸透してきた。(生活支援課)
- 現場でひきこもりの相談を受けたときに専門機関として紹介できることがメリットだと思う。(保健福祉課)
- ひきこもりの原因はさまざまで奥が深い。「リンク」で話を聞いてもらう中で解決の糸口が見つかるが良い。(保健福祉課)
- 一元的なひきこもり相談窓口ができたことで、区民・関係機関からの相談窓口がわかりやすくなった。(健康づくり課)

今後の連携について

- アウトリーチとなると「ぼーと」がすぐに対応してくれているので、そちらに頼むことが多い。会議で話し合ったことをもとに、役割分担してもう少し早く動いてもらえるとうよかった。(あんすこ)
- 会議で決まった方針は、普段関わりの少ない機関との連携になるので、そのコーディネートが難しいと感じた。(児童相談所)
- ぼーとと「リンク」、どちらに連絡をするか、迷うことがある。(あんすこ)
- 会議で各機関が確認すると決定した内容について、「リンク」は期限を定めて集約し、それを遅滞なく関係機関と共有するよう体制を整えてほしい。(生活支援課)
- 引き続き、ひきこもり支援の専門性を活かしたネットワーク機関となってほしいと思う。(保健福祉課)
- 「リンク」と健康づくり課の役割、期待することなどの共通認識がまだ十分ではない。今後、事例を積み重ねることでスムーズな連携ができるようにしていきたい。(健康づくり課)



2. 利用者の声

息子の社会的なひきこもりで大変悩んでいた時に、話を熱心に聞いてくださり、私の精神的な支えとなっていただきました。困ったらいつでも頼れるという安心感に救われました。

最初は当事者（娘）の問題をどのように対応したらよいかという視点で、一方的に考えていたが、職員の方とお話しし、何回か継続してお話し合いをさせていただくうちに、自分自身の見方が一方的であったこと、相手を受け入れていなかったことに気づかされた。

一歩踏み出すきっかけとなった相談の時間の中でひとつずつゆっくりとお話を聴いて下さったこと、問題解決に向けて一緒に考えて下さったこと、あせらずに少しずつ進めるよう支援して下さいましたこと、などがとても役立ちました。

どうするかわからなかった障害年金を申請していただけることができました。面接のときよく話を聞いていただけます。

話を聞いていただけると言うだけでも非常に気持ち楽になります。普通の知人友人といった関係の人には話せません。

また、一人ではどうしても前に進む勇気が持てず、行動するきっかけを与えてもらえてとても感謝しております。

社会への復帰ができるのか不安です。忙しいのはわかるのですが、担当の職員さんに電話しても他の電話にでてたり、休暇中だったりして、お返事がもらうのに時間がかかると不安になります。

支援の進展の速度が遅い事、利用者のやる事が少ない事でしょうか。利用者さんの状態によっては簡単なボランティアを次々と紹介してやらせた方が、社会とつながっているという意識の強化、やりたい事を見つける、自分の自信になる、といった点で有効かと考えます。特に有償のボランティアは、自身が自由に使えるお金を得る事で、より多額の収入を得たいという意欲につながりました。



第四章 広報・啓発

第1節 研修会開催と「リンク」紹介

1. 8050問題研修会
2. 「リンク」説明
 - ① 区内他機関への説明
 - ② 視察対応
 - ③ 講演会参加

第2節 家族会・当事者会との連携

1. 家族会
2. 当事者会
3. 「かたら～な」

第3節 「リンク」キャラクター

第四章 広報・啓発

第1節 研修会開催と「リンク」紹介

1.8050問題研修会

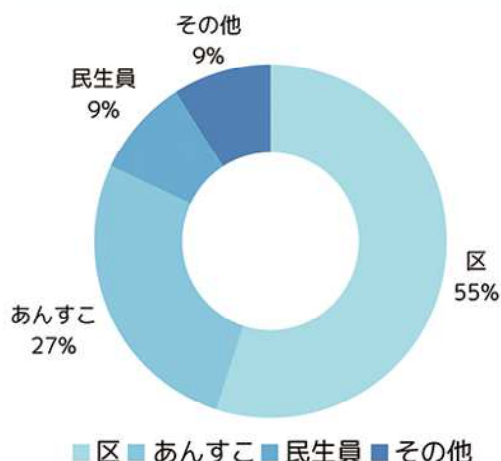
鳥取県立精神保健福祉センター所長 原田豊氏(精神科医)に講演を依頼し、「8050問題」についての講演会を開催。

主に中高年層のひきこもりについて語ってもらった。

講演後は出席者から具体的な質問が活発になされ、大変好評だった。

1年間はアーカイブ配信を関係機関のみを対象に行うことになり、出席者が「ぜひ見たほうがいい」と所属部署内で勧めてくれている。

参加者アンケート結果



大変参考になった	ある程度参考になった	あまり参考にならなかった	未回答
8	0	0	20
80%	0%	0%	20%

- ・ 具体的でわかりやすい内容でした。ありがとうございました。
- ・ ひきこもりの原因、経過、見きわめのポイントなど、とても分かりやすく理解が深まりました。
- ・ 対人恐怖、集団恐怖が大きな要素ということ、今後の支援業務で肝に銘じたいと思います。
- ・ 実践に基づく分かりやすい内容でした。自分の実践と重ねあわせて、確認することができました。
- ・ ポイントが分かりやすく、とても聞きやすかった。本人を中心にした支援で励まされるような内容でした。
- ・ 精神疾患、発達障害、それぞれの要因によって対応が違うことは大変参考になりました。

2. 「リンク」説明

① 区内他機関への説明 46件

ぷらっとホームとメルクマールの異なる2機関が対応をするため、当初はそれぞれの機関の説明と「リンク」の特徴的な取組みを紹介していた。しかし組織の特徴を理解するためには工夫が必要ということで、回を重ねるごとに事例を交え2機関の協働を示すなど工夫を凝らした。

また、業務で時間内に参加ができない支援者たちへ向けて、オンラインでの説明会を開催し、アーカイブ配信も行った。

説明事業所

- ・ 各地域ケア会議
- ・ 相談事業所連絡会
- ・ ぽーと連絡会
- ・ エフエム世田谷 など

②視察対応 10件

初年度の取組みであるが、各方面からの視察の申し出があった。

【他自治体視察対応】

大田区、墨田区、町田市、中野区、熊本県、静岡県

【その他】

大学職員ヒアリング調査、東京都ひきこもりサポートネットヒアリング

③講演会参加 3件

以下の講演会に参加し、「リンク」の取組みについて紹介を行った。

6月5日 オンラインシンポジウム

「これからのひきこもり支援を考える」として、「リンク」に関わる各機関の説明を行った後、世田谷区長と筑波大学教授 齋藤環氏(精神科医)による対談を区民向けに行った。

世田谷ひきこもり相談窓口「リンク」
開設記念シンポジウム
これからの
ひきこもり支援を考える

令和4年 6月5日(日) 13:30~16:30 (13:15開演)
定員：500名 (5月16日受付開始 先着順)

第1部 ひきこもり相談窓口「リンク」の開設について
「リンク」と関係機関のご紹介
・ふらっとホーム世田谷
・メルクマールせたがや
・せたがや若者サポートステーション

第2部 齋藤環氏(筑波大学教授)と区長の対談
「これからのひきこもり支援を考える」

ゲスト：齋藤環氏 (筑波大学教授) 保坂展人区長

2月18日 世田谷はなみずきの会による講演会

一般社団法人ひきこもりUX会議代表理事林恭子氏
「ひきこもりを理解し、希望あるこれからを考える
～当事者からのメッセージ～」として当事者として
のお話や今後について講演いただいた。
講演後の時間でひきこもり相談窓口「リンク」の取
組みについても来場者に説明。

ひきこもり地域支援会 世田谷はなみずきの会
ひきこもりを理解し、希望あるこれからを考える
～当事者からのメッセージ～

講師 林 恭子氏

一般社団法人ひきこもりUX会議代表理事
高校2年で不登校、その後20代まで継続的にひきこもり。住み着ける職場探しや
同じような経験者との出会い、少しずつ歩みを進める。
2017年より「自分らしく生きていくためにできること」を「当事者発信」を軸とし、
イベント開催の、講演、執筆の活動などによる事業活動をしている。

2023年 2月18日(土)
13時～16時30分(受付12時30分より)

北区区民会館別館「梅丘パークホール」
(京橋駅前ビル5-4-1 小島急斜路7丁目北口徒歩1分)

対象：ひきこもりに悩んでいる方、関心のある方

参加費：無料
定員：80名(先着順)
申込先：世田谷はなみずきの会 ※hanamizuki.setagaya@gmail.com
世田谷区京橋駅前ビル5階501号室 電話03-5432-2917 fax03-5432-3020
申込期限：令和4年2月17日(金)午後5時迄

3月5日 アウトリーチネットシンポジウム参加

「8050世帯に出会う支援者の声」
一般社団法人コミュニティメンタルヘルスアウトリ
ーチ協会の研修、鳥取県立精神保健福祉センター所
長 原田豊氏(精神科医)の講演の後、シンポジウム
に登壇。
船橋あんしんすこやかセンターとともに世田谷区の
取り組みを紹介。

3/5
14:00 - 17:30

8050問題
国策「8050問題」の推進と地域での連携システム作りについて

鳥取県立精神保健福祉センター 原田 豊 氏 登壇

定員 200名

シンポジウム
「8050世帯に出会う支援者の声(現状と課題)」

実行グループ 訪問看護ステーション 船橋 佐野 淳子 氏
船橋、フジ薬局 船橋あんしんすこやかセンター 船橋 渡辺 美穂 氏
船橋のひきこもり相談窓口 リンク
船橋市ひきこもり支援センター 船橋市健康福祉課 船橋市健康福祉課 船橋市健康福祉課 船橋市健康福祉課
船橋市健康福祉課 船橋市健康福祉課 船橋市健康福祉課 船橋市健康福祉課 船橋市健康福祉課

お申し込み方法
▶ 下記URLよりお申し込みください(クレジットカード、コンビニ支払い不可)
https://outreachnet8050.com/
▶ スマホのQRコードからもアクセスできます

▶ お申し込み後のキャンセルはできません。ご注意ください
▶ 申し込み締め切り：2023年3月1日(火)21時00分まで
▶ コンビニ決済は2月27日(土)21時00分まで受付となります
▶ 定員に達した場合は、申し込みの多い順にキャンセルとなります。ご了承ください

参加方法
▶ パソコン・スマートフォン・タブレットからご参加いただけます
▶ 船橋市と12ワードは、イベント終了後、3月4日12時から、Pheonix上の
ダイレクトメールDMでお知らせいたします
▶ イベントURLのQRコードの読み取りに必要のアプリ・決済・録音は
各自でご用意ください

第2節.家族会・当事者会との連携

1.家族会

ひきこもり地域家族会 世田谷はなみずきの会
～家族会開催のお知らせ～

日程：毎月第2土曜日 13時30分～16時30分
会場：宮坂区民センター3F 中会議室
宮坂1-24-6 (東急世田谷線 宮の坂駅下車すぐ)

対象：ひきこもりの当事者を抱えるご家族と当事者・関係者
内容：講話・懇談・情報交換を行います
※参加費500円 (当事者無料)

「学校に行かない」「家にこもりがち」「社会参加・就労していない」「家族として本人への関わり方がわからない」など
誰れごとの悩みはありませんか？
世田谷はなみずきの会は、同じような環境にある家族が出会い、思いも自由に語り合い、交流ができる安心な「居場所」です。その場にいるだけで大丈夫です。一人でかかるとまよって、まずは、気軽に立ち寄ってみませんか？...

世田谷はなみずきの会
社協ホームページ

Twitter 始めました
@hanamizuki03

連絡先：hanamizuki.setagoya3@gmail.com
※メールでの連絡が難しい方は、下記へご連絡ください。
世田谷区社会福祉協議会 経営地区事務局 02070-3946-9788

ひきこもり地域家族会「はなみずきの会」は世田谷区社会福祉協議会のふれあい・いきいきサロンとして登録されており、月に1回第2土曜日に宮の坂区民センターにて会合を開いている。令和4年度は世田谷地域社協事務所の協力でハイブリッド開催にも挑戦。活動の幅を広げている。

また、区と共催で年1回講演会も開催しており、令和4年度はUX会議の林恭子氏をお迎えした。

例年、定例会でぶらっとホーム、メルクマールがそれぞれの窓口の紹介を行っていたが令和4年度は「リンク」の開設に伴い、「リンク」の説明を11月に行った。当事者会とはイベント開催やSNS配信の協力関係にあり、「リンク」の窓口の広報活動にも関わってくれている。

2.当事者会

ひきこもり居場所カフェ
IN世田谷

ひきこもり当事者を主とした
生きづらさを抱えた人々の居場所づくり
ひきこもり(元)当事者とその家族や支援者の方々と一緒に居場所運営を行います。
セミナーやアウトドアを企画しています。

参加されたい方、協力したい方、お待ちしております！
興味のある方は右のQRコードからホームページにアクセスし、問い合わせフォームよりご連絡ください！

ひきこもり当事者会との連携では、「リンク」スタッフの定例会への参加やイベント開催のお手伝いを行った。

【イベント】

- 令和4年7月 大山 山登り
- 令和4年10月 NPO法人障害者支援情報センター
進藤義夫氏講演
- 令和4年11月 長尾修身氏講演(社会保険労務士)
- 令和5年3月 平幸司氏(精神科医)講演
(はなみずきの会と共催)
- 令和5年3月 「かたら～な」開催
※内容は次ページ参照

POINT

ひきこもり相談窓口をどのようなものにするのかのご意見、そして「リンク」の愛称、キャラクター募集など、大事なことを決定する時にはいつも家族会、当事者会の皆さんに支えられている。

3. 「かたら～な」

当事者会、家族会、そしてCOMOLY(※)の協力により、ひきこもり当事者や経験者、家族や支援者が集まってテーマに沿って語る会を令和3年度に引き続き開催。ハイブリッドで行い、リアル参加もオンライン参加も大盛況であった。

(※)ひきこもりと社会を繋ぐことを目的としたオンラインプラットフォーム



日時 : 令和5年3月18日(土)
参加者総数 : 71名
リアル参加 : 31名
オンライン参加 : 40名

テーマ

1. ひきこもりの家族はどうする? ゲスト : 丸山康彦さん
2. 依存症・魂の回復から生きづらさを見る ゲスト : 藤原秀博さん
3. 外に出なくても就職できる～在宅勤務の可能性～ ... ゲスト : 木村忘義さん
4. 40代からの無理しない生き方 ゲスト : 山瀬健治さん
5. 未だ『人と違う』ことが武器でない社会 ゲスト : 最内翔 さん
6. 譲れない事・守りたい事は何ですか? ゲスト : Tokin さん
7. ひきこもり当事者との安心できる関わりについて ... ゲスト : 久保亘 さん

アンケート結果

- ・とても有意義な集いでした。またの企画を楽しみにしています。音声聞き取りにくい時が度々あったのは残念でした。
- ・渦中にある当事者の立場の人たちと、家族の立場の人たちが率直に話をできるような場。難しいとは思いますが、あえて他人同士なら、実の親子ではできない話ができそうです。

コラム

令和3年度に「リンク」開設の準備期間として話し合いを重ねていたが、いざ初年度が始まったところではまだ手探り状態の部分も多かった。その中で、それぞれの機関の特徴を説明しながらも、その2つがどのように一緒に対応を行っているのかをうまく説明するすべを探しながらの広報活動だった。

開設後は回を重ねるごとにバージョンアップを行い、伝え方を工夫してきた。そしてその伝え方を考える過程が、「リンク」の現場でのよりよい連携を考える機会にもなっていった。

今後は積み重ねてきた事例も取り入れながら、より分かりやすく、リアルに感じてもらえる広報を確立させていきたい。

第3節 「リンク」キャラクター

④ 世田谷 ひきこもり相談窓口「リンク」
イメージキャラクター募集中！！



・・・いつか、を今、描いてみませんか？

募集期間
令和5年1月1日（日）～2月1日（水）まで
詳細はホームページまたは、別紙募集要項でご確認ください。



問い合わせ先：世田谷区保健福祉政策課生活福祉課
電話 03-5432-2917 FAX03-5432-3000

区民のひきこもりに対する理解を促進するとともに、「リンク」をより身近に感じてもらうため、イメージキャラクターを製作しました。イラストの原案を公募したところ、募集期間内に全46作品の応募があり、審査の結果、最優秀作品をキャラクターに決定しました。

募集期間 令和5年1月1日(日)から2月1日(水)
応募資格 募集期間内に世田谷区在住、在勤、在学である方
応募基準 自作未発表のもので、「リンク」の趣旨に合う名前、デザインであること

【一次審査】区が設置する選定委員会で最終候補作品（11作品）を選定

【二次審査】最終候補作品の中から、区民投票により最優秀作品候補を選定（投票数130票）

選考には家族会や当事者会も参加

そして...



※130票中、最多の **43票** を獲得！！

第五章 総括

第1節 令和4年度の取組み状況

1. 「リンク」内の協働
2. 多機関との協働
3. 相談者の思いと制度の活用

第2節 令和5年度に向けて

1. 目標とする取組み
2. スタートしている令和5年度への取組み
3. より良い支援体制に向けて

第1節 令和4年度の取組み状況

1. 「リンク」内の協働

■ 異なる2機関の視点の違い

相談者や相談対象世帯にとって「目指したい生活はどのようなものか」を軸に支援を進めていくという、基本となる支援観で2機関での「リンク」支援を進めている。関わる支援者が多ければ多いほど、支援方針の統一は難しくなる。

「リンク」の特徴は、臨床心理士等の視点を活かしてメンタル面へのアプローチを行うメルクマール、社会福祉士等の視点を活かして生活全般へのアプローチを行うぷらっとホーム両方の視点から、ひきこもり当事者さらには世帯全体にとって、より良い支援を検討することができる体制としたことである。

実際には、2機関の職員が2人ペアで面談に入ることも多い。相談者一人に対して2人がどのように話をしていくかに関しては、相談者への共通理解を深めていくと同時にペアのスタッフへの理解も図る必要があり、未だ手探りの状態が続いている。

一方で、複合的な課題がある世帯に対し、インテーク時から複数の視点で見ることができ、幅広いアセスメントに基づいた支援を展開できることは大きな利点であると感じている。

■ 情報と方針の統一化

ぷらっとホームとメルクマールという二つの異なる機関がともに一つの窓口を運営する難しさはあった。開所時間も異なり、同じ建物内でもフロアが違うため、情報の共有方法や得意とする業務の異なる機関同士がどのように支援方針を統一させるかは課題であった。その点に関しては、以下のような目的の異なるミーティングを行い、細やかにケースの共有をするように工夫した。

- ①「リンク」検討会（実務者と所管課）：週1回（1時間30分）、新規相談者の受理など。（P.11を参照）
- ②ミニミーティング（実務者）：週2回（15分）、日々の申し送り。
- ③スタッフミーティング（実務者）：月1回（1時間）、臨床運営上の課題の確認と改善方法。

2. 多機関との協働

■ 協議の場

複合的な課題を持つ家庭には多機関の関わりが必要となることが多く、「つなぐ」だけではなく「つながりながら協働していく」ことを大切にしてきた。それぞれの機関と情報を共有するだけでなく、今後の動きを共有し方向性を一致させるために活用してきたのが、社会福祉法第106条の6に基づく「個別ケース検討会議」である。この会議を通して、互いの情報交換に加えて、顔の見える関係を構築することにより、多岐にわたるニーズに対し、迅速、柔軟に対応できると感じている。

この会議は、当事者や家族が来所できない場合も開催が可能である。当事者や家族が相談につながっていない世帯の中には、課題がこじれ、複雑化していることも多いため、世帯に関わるきっかけとなりそうなポイントを会議で浮かびあがらせ、必要時にすぐに動けるように事前に相談しておくことが重要である。

■ 情報の共有

関わる機関が増えれば増えるほど、情報の共有は難しい。共通のシステムがあるわけではないので、刻々と変化する状況をリアルタイムに共有することはなかなか困難である。現在は情報共有のために電話を使うことが主であり、それに要する時間が課題である。

■ 役割分担

相談者の世帯状況、年齢、抱える課題は多様で、相談内容は複雑多岐にわたっている。課題を解きほぐし、解決方法を探っていると法制度の狭間の問題を抱えているなど、各支援機関の現状の役割だけでは対応できないことが出てきている。

今後の多機関協働にあっては、各機関が現状の役割に留まらず、できることを考え、狭間の問題を互いがどのようにフォローしていくのかについて一緒に考えていく必要があると感じている。

3.相談者の思いと制度の活用

現在様々な支援ツールを使って対応を行っているが、何よりも一番大事にしているのは相談者の思いである。当事者本人、家族、それぞれに思いがあり、それを十分に理解し大切にした上で支援方針を立てなければ継続には至らない。

また、相談者は、「リンク」ができたことで初めて相談をしたと話される方も多く、相談するまでに相当の期間悩みを抱えてこられた重みを感じている。相談受付後は速やかに相談体制を整え、相談・支援が継続していけるように配慮している。

実際に「リンク」では家族から当事者につながった例が25件あるが、当事者本人に会って話を聞くと、周囲から聞いた印象と実際の印象が異なることがある。そのため当事者本人の思いをしっかりと聞くことの大切さを改めてこの一年を通して感じている。そして、「どうなりたいか」その思いを実現することができるよう制度利用につなげていくことが、ひきこもり当事者の前向きな気持ちの変容につながると感じる。



第2節 令和5年度に向けて

1. 目標とする取組み

■ 相談につながる方を増やす

- ① 広く区民に「リンク」を知ってもらうための講演会やセミナーを開催する
- ② 地域の支援者向けに「リンク」説明会を積極的に行う
- ③ 関係機関の支援者に取組みを理解し、協働をより推進するために、支援者向け説明会や研修会の開催、個別ケース検討会議の意義の浸透を図る
- ④ 当事者会や家族会の取組みについて意見交換をし、新たな協力体制のあり方を構築する
- ⑤ 全国の窓口のより良い取組みを参考にし、取り入れていく

■ 来所した方が自分らしい暮らしをできるようにサポートをする

- ① 支援体制のさらなる構築と拡がりを促進する
- ② アセスメントを充実させ、支援内容の評価や分析を行い、今後の支援に活かしていく

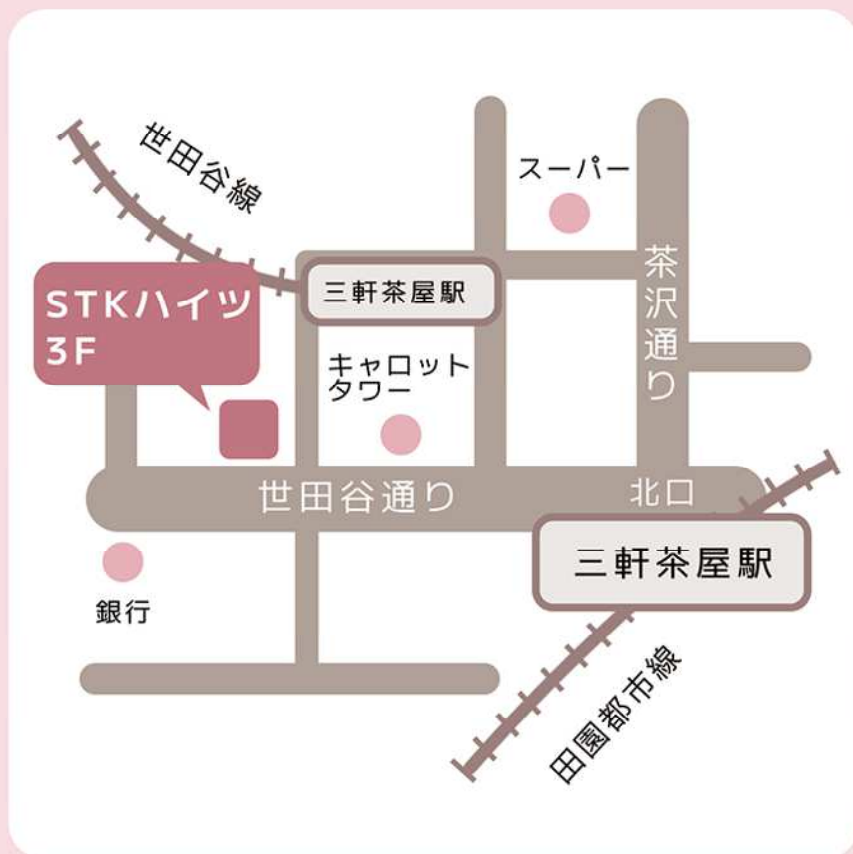
2. スタートしている令和5年度への取組み

「リンク」はぷらっとホームとメルクマールの複数の視点を活かし、的確なアセスメントを行うことが求められている。アセスメントのツールとして、令和3年度の1年をかけて帳票等の検討を行ってきたが、開設後1年が経ち、相談の実績を踏まえて帳票を見直すこととなった。ぷらっとホームとメルクマール双方の視点で作成された帳票も、1年間面談を共にすることで新たに改善点がみえてきた。これは面談と方向性の検討を毎回一緒に行うことから見えてきた成果でもある。

3. より良い支援体制に向けて

1年を通して窓口を運営し感じることは、ひきこもりの問題は多様であり、一つとして同じ「ひきこもり支援」というものはないということである。家族構成や家族関係、経済的な問題や体調面など、どれか一つだけに対応するのではなく、総合的に判断をすることが重要である。そのため、令和5年度も関係機関と連携し、それぞれの専門性を有効活用しながら個別ケース検討会議を開催していく。

また、様々なニーズにこたえるために、今まで以上の多くの関係機関とつながり、地域資源の開拓も行いながら、制度の狭間を埋め、ひきこもり当事者やその家族の方が安心して自分らしい生活ができるような支援に努めていく。



- 電車** 東急田園都市線「三軒茶屋」駅 徒歩3分
 東急世田谷線 「三軒茶屋」駅 徒歩2分
- バス** 世田谷通りから渋谷方面行「三軒茶屋」
 徒歩1分

※駐輪場・駐車場はありません。

世田谷ひきこもり相談窓口「リンク」 令和4年度 事業報告書

令和5年6月7日 発行

編集・発行

世田谷区生活困窮者自立相談支援センター
 (ぷらっとホーム世田谷)

事業運営

社会福祉法人 世田谷区社会福祉協議会
 公益社団法人 青少年健康センター【茗荷谷クラブ】

所在地

〒154-0004 世田谷区太子堂4-3-1 STKハイツ3階
 TEL 03-5431-5354
 FAX 03-5431-5357

「リンク」HP

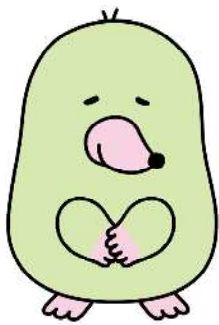
https://platsetagaya.jp/hikikomori_soudan



製作

COMOLY





世田谷
ひきこもり相談窓口「リンク」

